

令和四年度 大学院人文科学府修士課程第2期入学試験問題

(東洋史学)

次の各問に答えなさい。(解答は解答紙に記入)

問 I 明代初期の海禁と清代初期の海禁について、それぞれの時代的背景・政策

内容・歴史的影響を、両者の共通点と相違点にも留意して概述しなさい。

問 II 次の用語群のなかから、十語を選んで簡明に説明しなさい。

- ①長史
- ②大統曆
- ③来遠駅
- ④冠船貿易
- ⑤司礼太監
- ⑥恭献王
- ⑦銅座
- ⑧脇荷貿易
- ⑨万丹
- ⑩更紗
- ⑪呉須手
- ⑫万才町遺跡
- ⑬武寧
- ⑭楊載
- ⑮松倉重政
- ⑯ Jacques Speck

『瀛涯勝覽』 ⑱ 『海東諸国紀』 ⑲ 『東西洋考』 ⑳ 『大村記』

問Ⅲ 問題A・Bのうち一問を選択し、なさい（解答の字体は常用漢字・繁体字のどちらでも良い）。

問題A 次の漢文史料を書き下し文にしなさい。

又嘗念國家大一統之治、必有信史以載內外之事、如『大明一統志』者是已。誌中所載琉球之事、所云「落濤者、水趨下不回也、舟漂落濤、百無一回」。臣等嘗懼乎此、經過不遇是險、自以為大幸。至其國而詢之、皆不知有其水、則是無落濤可知矣。又云「王所居壁下、多聚觸髅以為佳」。臣等嘗疑乎此、意其國王兇悍而不可與言也。至王宮時、遍觀壁下、亦皆累石。國王則循循雅飭、若儒生然。在彼數月、雖國人亦不見其相殺。又何嘗以觸髅為佳哉。是志之所載者、皆訛也。不特志書為然。杜氏『通典』・『集事淵海』・『羸蟲錄』・『星槎勝覽』等書、凡載琉球事者、詢之百無一實。若此者何也。蓋琉球不習漢字、原無志書。華人未嘗親至其地、胡自而得其真也。以訛傳訛、遂以為志、何以信今而傳後。故集群書而訂正之。此「質異」之所以作也。兼以夷語・夷字恐人不知、並附於後。臣等學問麤疏、言詞鄙俚、勉成此錄、實不足以上塵睿覽。但念海外之事、知之者寡。一得之愚、或可以備史館之採擇。是以不避譴責、陡膽進呈。伏惟陛下恕其狂僭、下之禮部詳議施行、臣等不勝幸甚。

（陳侃『使琉球錄』題奏）

問題B 次の漢文史料を現代日本文に訳しなさい。

臣閩人也。閩自紅夷入犯、就彭湖築城、脅我互市。及中左所登岸、被我擒斬數十人、乃以講和愚我、以回帆拆城緩我、今將一年矣。非惟船不回、城不拆、且來者日多。擒我洋船六百餘人、日給米、督令搬石、砌築禮拜寺於城中。進足以攻、退足以守、儼然一敵國矣。今彭湖盈盈一水、去興化一日水程、去漳・泉二郡只四五十里。於此互市、而且因山為城、據海為池、可不為之寒心哉。且閩以魚船為利、往浙、往粵、市溫・潮米穀、又不知幾十萬石。今夷據中流、魚船不通、米價騰貴、可虞一也。漳・泉二府負海居民、專以給引通夷為生、往回道經彭湖。今格於紅夷、內不敢出、外不敢歸。無籍雄有力之徒、不能坐而待斃、勢必以通屬夷者轉通紅夷、恐從此而內地皆盜、可虞二也。臣鄉自被倭殘破、收復之後、凡要害之處皆設武弁、欽依與名色相間碁置。今不知何故、自各道中軍以及名色把總盡改題為欽依。一省之內、增至三十員欽依、則必增廩糧・柴馬・輿皂・家丁、所占役冒濫又不知若干。至各道中軍、但每月投文發放、無兵可練、安用此輩。名器太濫、供應太繁、勢必公私俱困、可虞三也。

〔『明清史料』乙編、明季荷蘭人侵據澎湖殘檔「南京湖廣道御史游鳳翔奏」〕